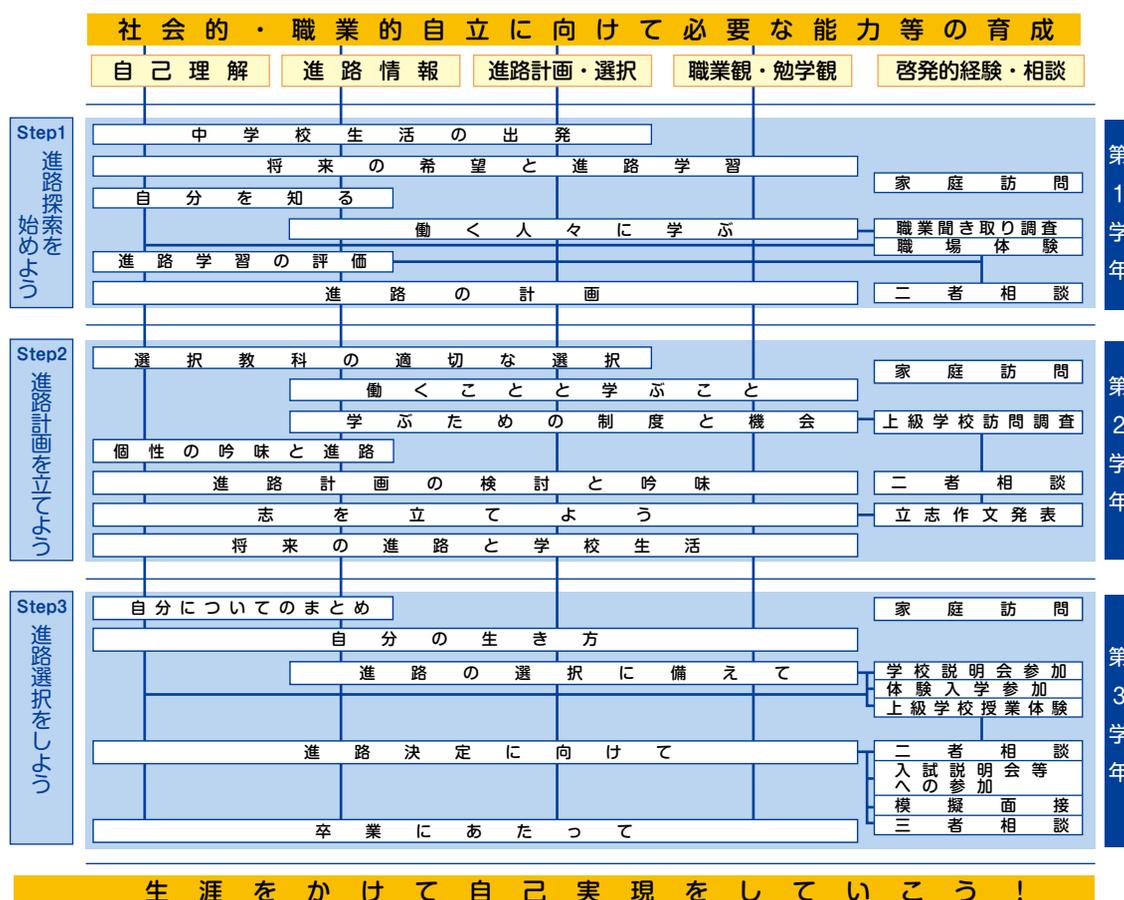


第3節 3年間を見通した系統的なキャリア教育の取組

活動の意義や価値がどんなに高いものであっても、一つ一つの活動につながりがなくばらばらに行われていたのでは、その活動はその場限りのものとなってしまう、時間とともに変化・成長していく一人の生徒にとっては、キャリア発達を円滑に促していく指導とはならない。また指導する側の教師に「その活動のキャリア発達を促す指導・援助における位置付け」や「それぞれの活動のキャリア発達を促す指導・援助におけるつながり」の認識がなければ、本当の意味で生徒一人一人の成長・発達を支援する活動とはならないだろう。そこで、特別活動を中核としながら、各教科や道徳、総合的な学習の時間、その他のそれぞれの教育活動につながりをもたせ、3年間を見通した系統的なキャリア教育を、学校教育全体を通して行っていく必要がある。

次の図はある中学校の特別活動を中心とした進路指導における「3年間の題材系統図」である。この中学校では、社会的・職業的自立に向けて必要な能力等の育成のために、中学校3年間の特別活動における進路学習を各学年で系統的・継続的に実施している。「啓発的な経験と相談」を中心としながら、「自己理解を図る」「進路情報を得させる」「進路計画を立てさせる」「進路選択をさせる」「勤労観や勉学観を育てる」などの指導が、相互につながりをもって行えるよう関係が整理されている。また、それぞれの学習が1年生から3年生までの間に発展的に進められるよう構成されている。

中学校におけるキャリア発達のとらえ方の一例



生涯をかけて自己実現をしていこう！

1 個に応じた指導・支援とキャリアカウンセリング

学校におけるキャリアカウンセリングは、生徒一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、生徒たちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別又はグループ別に行う指導・援助である。キャリア発達を支援するためには、個別の指導・援助を適切に行うことが大切であり、特に、高等学校への進学など、現実的に進路選択が迫られる中学校の段階では、一人一人に対するきめ細かな指導を行うキャリアカウンセリングの充実は極めて重要である。

教員は生徒たちとの人間関係を築いていく中で、一人一人の理解に努め、キャリア発達における個人差を認識し、個々の生徒に応じた指導に当たる必要がある。そのためには、定期的な面談やキャリアカウンセリングの機会を設け、個々の生徒の望ましいキャリア発達を支援することが大切である。この際、学校の年間指導計画に教育相談の機会を複数配置するなど、学校全体の共通理解のもとで取り組むことが望まれる。また、特に課題を抱える生徒については、家庭やスクールカウンセラーとの連携を密にするなど、かかわりを持つ者との協力体制を整え対応する必要がある。

(1) キャリアガイダンスとキャリアカウンセリング

思春期を迎えた中学生は、学校生活や将来の生活に対する漠然とした不安を抱えている者も多い。多様化が進む中で進路を選択していくことが難しくなっている現状から、ガイダンスの機能を充実させていくことがますます求められてきている。『中学校学習指導要領』総則第4の2(5)では次のように述べている。

生徒が学校や学級での生活によりよく適応するとともに、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、ガイダンスの機能の充実を図ること。

ガイダンスの機能の充実を図ることは、すべての生徒が学校や学級の生活により良く適応し、豊かな人間関係の中で有意義な生活を築くようにするものである。それとともに、選択や決定、主体的な活動に関して適切な指導・援助を与えることによって、現在及び将来の生き方を考え、行動する態度や能力を育てる上で、極めて重要な意味をもつものである。キャリアガイダンスとキャリアカウンセリングは密接不離の関係にあり、これらを相互に関連して計画的に行うことに意義があると言える。

『中学校学習指導要領解説総則編』には「各学校においては、計画的・組織的な取組によってガイダンスの機能を充実させることにより、一人一人の生徒に関し、学校や学級の生活により良く適応させ、これから取り組むことになる諸活動に対して主体的な活動への意欲を持たせ、自己実現にかかわって必要とされる資質や能力、態度を身に付けるようにし、共に学び、活動することを通して存在感や自己実現の喜びの感じられる生活を築かせる中でより良い発達を促すことが重要である」と記されている。また、個別相談やグループ相談を通じて進路への関心を高め、自己や現実の理解を深め、自己や現実を受容させ、人生設計やそれに伴う進路選択を行うことができる能力を伸ばして、将来の生活における適応と自己実現がより確実に達成できるように、人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力、課題対応能力やキャリアプランニング能力の発達を促すことが大切である。

(2)学校におけるキャリアカウンセリングの活動

すべての生徒が学校生活により良く適応し、主体的に活動して自己決定ができるよう、学習や学校生活、進路に関する不安を取り除き、新たな目標をもたせることが重要である。そのためには、卒業学年だけに偏らず、入学当初から計画的・継続的なキャリアカウンセリングの機会を設けることが大切である。計画に基づき定期的に行われるキャリアカウンセリングは、来談の自発性が低い生徒、自らの将来に関する興味や問題意識などが低い生徒にも、将来への視野を広げ、認識を深める機会を与えるだけでなく、教職員との自然なコミュニケーションを通して生徒の不安感を少なくすることに役立ち、自発的に相談にくる意欲を育てることにもなる。

定期的なキャリアカウンセリングの計画を作成するに当たっては、それぞれの中学校においてキャリア教育の中核となる者(部・係)と学級担任とが十分に連携し、職業興味検査などの諸検査や、職場体験活動などの体験的なキャリア教育の機会などの関連を図ることが重要である。

また、キャリアカウンセリングは、授業中における短いやりとりや、休み時間などでの何気ない会話が糸口となることも多く、教職員はそれらの機会を逸さないよう、常にコミュニケーションスキルを向上させることが求められる。生徒が安心して自らの考えや悩みを表現し、疑問点を質問できるような関係の構築と保持が不可欠であろう。

一方で、生徒のプライバシーに深く関わる内容となる場合には、進路相談室などの活用が必要となる。その際、相談室が生徒にとって常に利用しやすく、温かい雰囲気となっていなければ、そこは生徒にとって緊張を強いられる場となり、効果的なキャリアカウンセリングの実践は期待できない。進路相談室などの維持管理にあたっては、生徒の視点に立った発想と工夫が特に求められる。

(3)各学年の課題と個に応じた指導・支援とキャリアカウンセリング

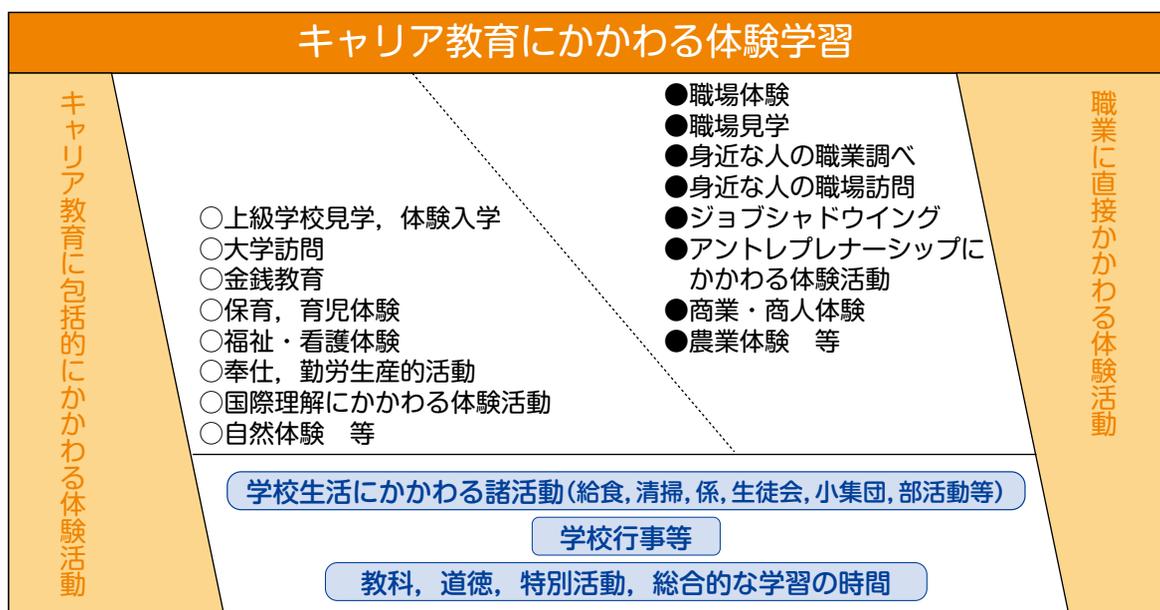
個に応じた指導・支援とキャリアカウンセリングを進めるには、各学年段階の特色やキャリア発達課題を考慮し、時期や課題に応じた指導・支援を実施していくことが大切である。

学年	主な課題例	個に応じた支援とキャリアカウンセリング例
1年	<ul style="list-style-type: none"> ○中学校生活へ適応する (学習, 教科担任制, 部活動など) ○新しい人間関係を作る (自他の理解, 集団での役割など) ○自分の将来を考える (職業の世界, 卒業後の自分など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校生活のガイダンス ・各教科担任による学習の仕方の説明 ・学級活動, 班活動などの支援 ・自己理解を図る学級指導の計画的実施 ・職業調べなどの活動の支援 ・個別面談, 三者面談などの実施
2年	<ul style="list-style-type: none"> ○中学校生活を充実させる (学習, 行事, 部活動, 生徒会など) ○集団生活の質を向上させる (他者への配慮, 社会の一員の自覚) ○将来を現実的に模索する (進路情報の収集, 進路の計画など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動, 生徒会活動, 行事などの支援 ・学力の状況や学習の仕方についての相談 ・人間関係の問題の改善と学級での話合い ・コミュニケーションスキルの指導 ・職場体験学習の実施と個別の支援 ・個別面談, 三者面談などの実施
3年	<ul style="list-style-type: none"> ○豊かな人間関係をつくる (自他の個性尊重, 円滑な人間関係) ○社会の一員としての責任を理解する (社会での生き方, 男女の協力) ○進路を選択・決定していく (進路の悩みの克服, 進路選択・決定) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自他の理解を図る学級指導の計画的実施 ・悩みを話し合える集団作りの指導 ・地域での活動やボランティア活動の支援 ・男女が共同して働く活動の支援 ・進路選択・決定のための情報提供と支援 ・個別相談, 三者面談などの実施

2 体験的な学びを生かした取組

生徒に自らの将来を考えさせるためには、学校内における教育活動だけではなく、多様な年齢・立場の人の講話や、社会や職業にかかわる様々な現場での体験を通して、自己と社会の双方についての多様な気付きや発見を経験させることが効果的である。学習指導要領の改訂においても、中学校では職場体験活動を重点的に推進することとし、職場体験活動はキャリア教育の視点からも重要な役割を果たすものと位置付けている。体験活動には、達成感や満足感を得ることによる自信や自己有用感の獲得、働くことや学ぶことへの意欲の向上など様々な効果が期待できる。しかし、その効果を十分に発揮させるためには、体験活動を一過性のものに終わらせるのではなく、ねらいを明確にして、ほかの教育活動と関連付けたり、事前・事後の指導を充実させたりすることが重要である。(職場体験活動については、本『手引き』第2章第5節(p.96～)を参照のこと。)

資料 中学校におけるキャリア教育にかかわる体験学習事例



国立教育政策研究所「キャリア教育体験活動事例集」平成20年より

体験活動の充実に向けての改善のポイント

- | | |
|---|--|
| ○学校教育全体における位置付け
(学校の活性化に向けてのキャリア教育の推進) | ○指導計画の改善と見直し
(工夫ある全体計画, 指導計画, 題材系統図等) |
| ○学びと社会とのかかわりの視点 | ○体験活動のねらいの明確化 |
| ○体験活動の在り方の工夫(日数, 回数…) | ○地域性を生かした体験活動
(伝統, 文化, 歴史等) |
| ○関係諸機関, 行政, NPO団体等との連携 | ○保護者との連携や活動参加への工夫 |
| ○学校の指導体制, 組織の工夫 | ○体験活動の評価の在り方 |
| ○体験活動の事前・事後指導の充実 | |
| | 等 |

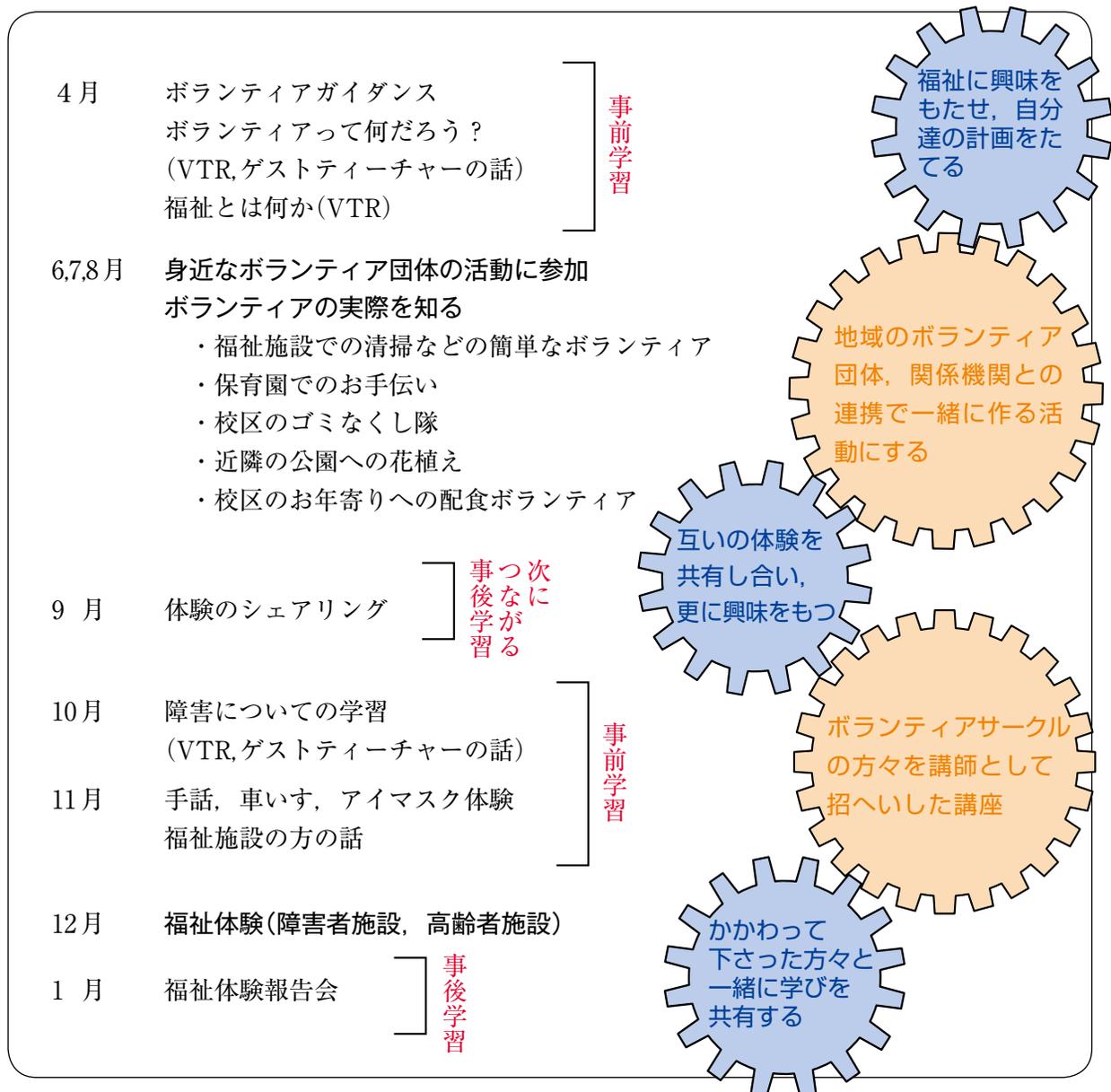
単元名 ボランティア活動に参加しよう

ねらい

- ボランティア活動を通じて、地域の人との交流や、学級相互の連帯感を高め、認め合い、励まし合い、高め合う人間関係が作れるようにする。

本実践とキャリア教育

- 従来から行われている募金活動、校内外美化運動をキャリア教育の視点で見直すことにより、ねらいが明確になり、それぞれの活動を連動させることで、自己有用感の獲得や社会への帰属意識が育ち、働くことや学ぶことへの意欲につなげることができる。



●実践のポイント●

最初のボランティア体験が、事後指導における他者と体験を共有する活動を通して、次の福祉体験に自発的に取り組もうとする意欲に結び付くよう、学習の継続性を考え、組み立てることが大切です。

3 各教科における学びを断片化させない工夫

キャリア教育は、すべての教育活動を通して展開するものである。キャリア教育の視点で生徒たちに働きかければ、それぞれの教育活動をキャリア教育につなぐことができる。それによって、キャリア教育を効果的に進めるとともに、それぞれの教育活動の質も高めることになる。特に教科担任制となる中学校では、各教科を「キャリア教育」で結ぶことで、複数の教師が互いの授業内容を知ることになり、それが新たな刺激となって、さらに指導に深みが出るのが予想される。

しかし、教科の学習については、高学年になればなるほど実生活から離れがちとなり、指導の在り方についても、生き方やキャリア発達という意識が希薄となる傾向があることも否めない。教師は、日ごろの教科の学習が、生徒一人一人の生き方や将来の進路と深く結び付いていることを十分に認識するとともに、教科における指導とキャリア教育との関連を常に意識して、生徒のキャリア発達を支援するという視点で指導の工夫・改善を図ることが大切である。

主な学習活動例

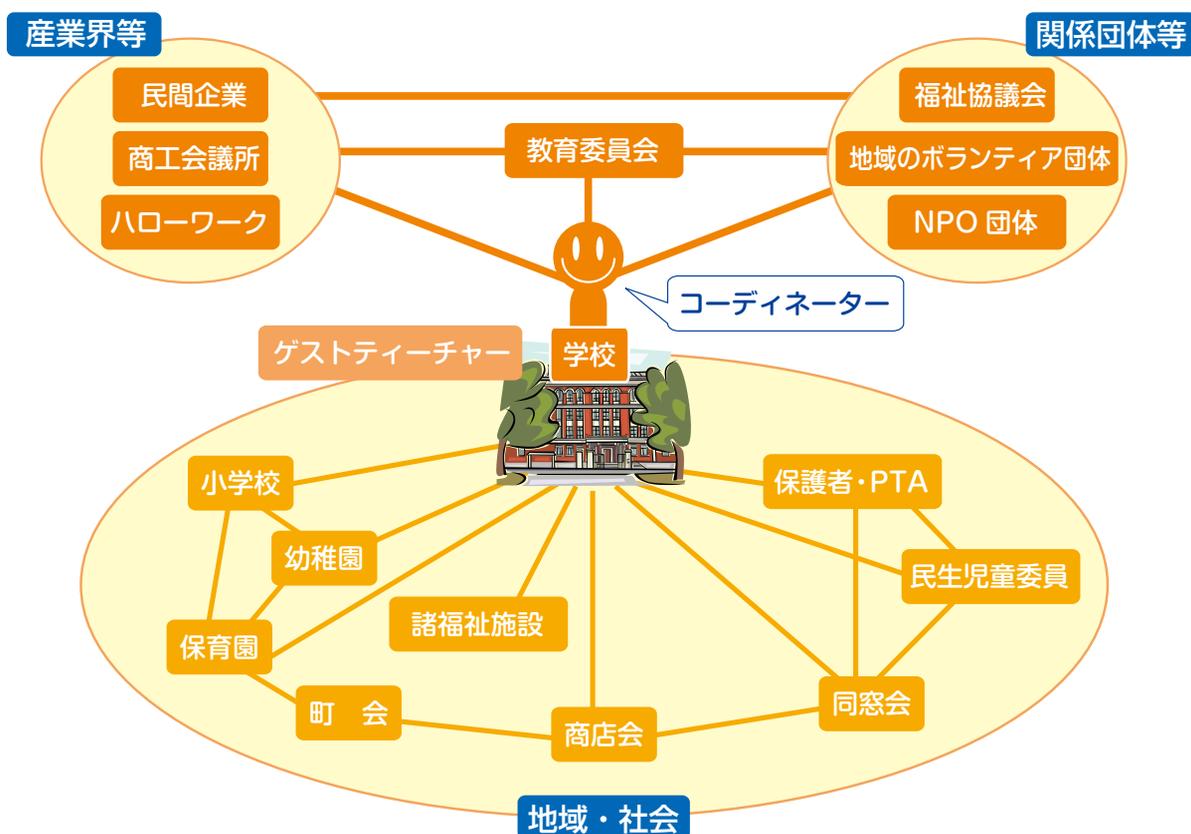


4 地域とともにつくる系統的なプログラム

教育基本法第13条では、「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」と定められているとともに、教育振興基本計画においては、基本的考え方の一つとして、「横」の連携、すなわち、教育に対する社会全体の連携の強化が挙げられている。

キャリア形成には、一人一人の成長・発達の過程における様々な経験や人との触れ合い等が総合的にかかわってくるので、中学校段階におけるキャリア教育が効果的な取組となるためには、学校が、生徒の生活時間を多く占める家庭や地域と積極的にかかわりを持ち、共に連携・協力をすることが必要不可欠である。学校と家庭、地域がパートナーシップを発揮して、互いにそれぞれの役割を自覚し、一体となった取組を進めることが重要である。

次に示すのはある学校区の「地域教育」の具体的展開図である。学校コーディネーターは、地域・社会の中にある学校を支援している様々な団体・機関と学校を有機的につなぐのを手助けしている。



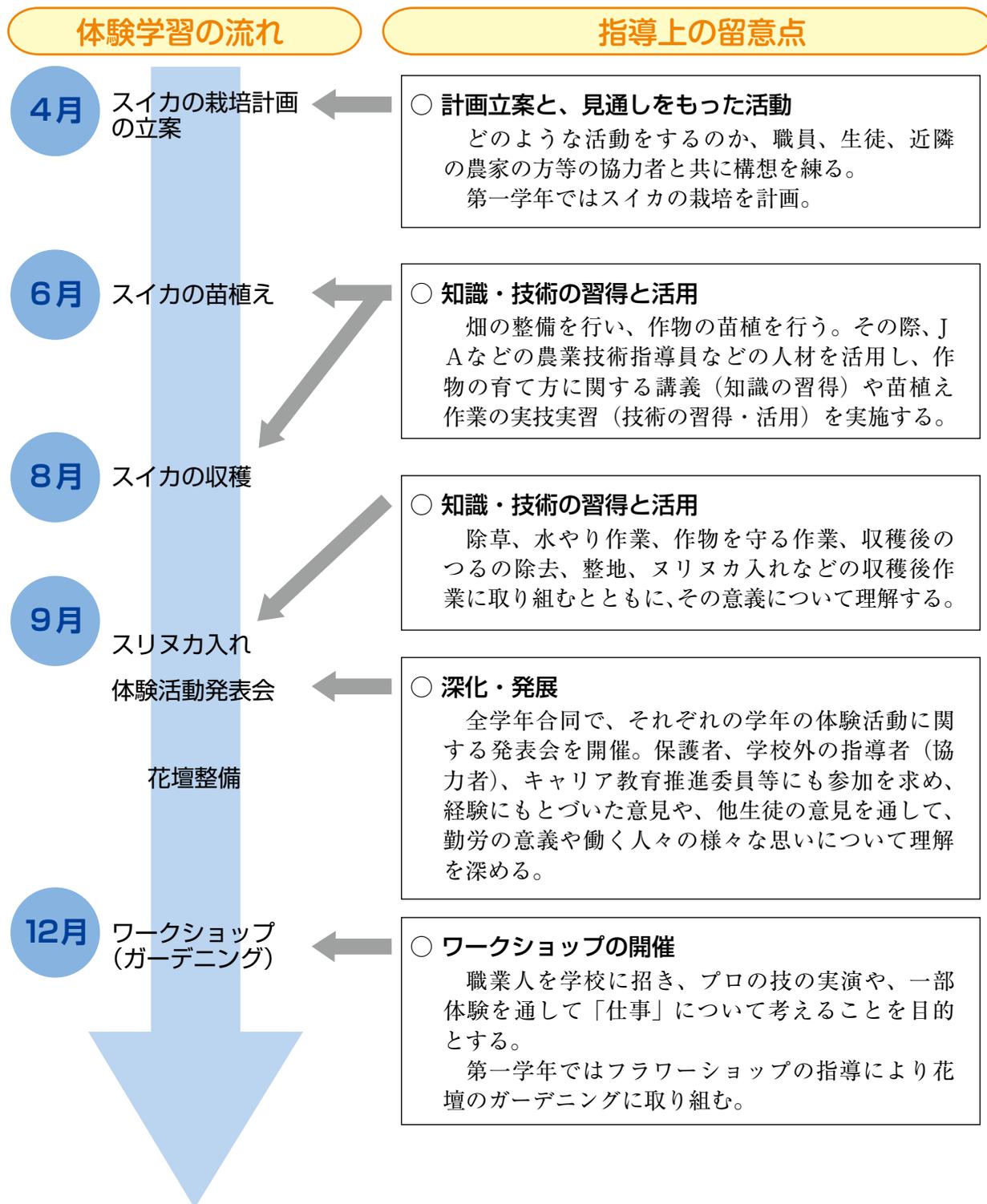
地域の教育環境，教育力を生かした活動

- ・ 幼児，高齢者や障害のある人と交流し，触れ合う活動
- ・ 介護・福祉に関するボランティア活動
- ・ 親子の協同の体験活動や交流活動（スポーツ活動や芸術鑑賞，工作教室，昔遊び教室）
- ・ 図書館や博物館などの公共施設での学習活動
- ・ 伝統芸能の継承
- ・ 国際交流
- ・ 地域の年中行事や祭り
- ・ 社会人講話，社会的なマナー・ビジネスマナー講座などの講話

<事例1> 地域の人材との連携による勤労体験学習 — A中学校の場合 —

年間を通して、地域の職業人を学校に招き、仕事への理解を深めるため「仕事に関する講話」や「実習指導」などの取組に係わってもらう。

第1学年の取組



<事例2> 小・中連携を生かし、学びのつながりを意識したキャリア教育
— B中学校・C小学校・D小学校の場合 —

学区内の小学校と中学校の連携を生かした、9年間を見通した一貫性のある指導と支援の在り方を追究する。

【学校の状況】

B中学校 生徒数 約500人(15学級)

○ 各学年4～6学級の中規模の学校である。学区は都市部にあり、貿易港に面した古くからの商業地である。そのため、伝統行事等で地域とのつながりも深い。学区内に二つの小学校がある。

C小学校 児童数 約230人(9学級)

○ 各学年1～2学級の小規模の学校である。6年間を1学級で過ごす生徒が多く、仲のよい反面、他者とのかわりが苦手である。

D小学校 児童数 約680人(24学級)

○ 各学年3～4学級の大規模の学校である。はつらつとして、元気な児童が多い。

【小・中連携研究協議会の取組】

○ 小学校6年と中学校1年の接続の在り方を中心に話し合い、確かな学力を身に付けるため、各段階での指導の重点について協議する。

○ 小・中の教職員が9年間を見通した指導方法の確立を視野に、学ぶ意欲を高めるための小中相互に呼応したカリキュラムの開発に取り組む。



人間関係を築く力を育て、学ぶ意欲を高めるためのキャリア教育と小中連携

(1)小・中の情報交換の場としての小・中連携研究協議会

B中学校とC・D小学校では、以前から小・中連携研究協議会を組織して、互いに授業を提示し、参観後に教科・領域等の分科会を開き、協議と情報交換を行っている。中学校側からの小・中連携は、どうしてもスムーズな小・中接続、いわゆる中1ギャップの克服に視点が偏りがちであるが、人間関係を築く力を育てるという視点に立つと、小学校における児童同士の間人間関係についてのよりきめ細かな情報交換とその有効活用が不可欠である。そこで、毎年2月に、3校の学年部、生徒指導部、養護教諭、研究部で小・中連絡協議会を開催し、児童同士の間人間関係について情報交換を行い、中学校入学後の学級づくりに生かしている。また、新入生の入学後も、必要に応じて随時情報交換ができる体制づくりに努めている。

(2)小・中連携研究協議会を通じた実践交流

小・中連携を児童生徒に関する情報交換の場だけにせず、児童生徒の発達の段階を把握し、それに即した指導方法や支援を考えるために、学区内における3校のすべての教職員で小・中連携研究協議会を年数回開き、小・中各教科の研究計画や教科における児童生徒の実態、指導上特に困難を感じている内容などについての情報交換・協議、小・中の合同授業についての検討、9年間を見通しの中で、段階ごとの指導の重点やカリキュラムの在り方についての意見交換などについて話し合いを続けている。

＜3校による小・中連携のねらい＞

- ・実践交流を通して、小・中の学習指導の一貫性、連続性を高める。
- ・課題研究協議を通して、課題解決の手立てを探る。
- ・小学校における人間関係について、よりきめ細やかな情報交換を行い、中学校での望ましい人間関係構築に活用する。
- ・中学校入学後も、積極的な情報交換に努める。

＜小・中連携の計画と内容＞

時 期	研 修 会 名 等	内 容
2 月	小・中連絡協議会	・小学校での児童同士の間関係などについての情報交換。
4 月	小・中連携研究推進委員会 (小・中3校の教頭、教務主任、 研究主任、生徒指導主事)	・各校の児童生徒の実態や指導上、困難を感じていること、効果的な指導の在り方について4つの分科会に分かれて協議する。
7 月	第1回小・中連携研究協議会 ・全体会：研究説明 ・分科会Ⅰ～Ⅳ：協議	・各校の児童生徒の実態や指導上、困難を感じていること、効果的な指導の在り方について4つの分科会に分かれて協議する。
	○分科会Ⅰ「学級づくりで大切にしたいこと」(基本的な生活習慣など) ○分科会Ⅱ「授業中の学習習慣を定着させるための手立て」(学習の約束など) ○分科会Ⅲ「各教科における言語活動の充実」(言葉を大切に活動など) ○分科会Ⅳ「家庭学習を含む家庭での生活指導」(家庭学習の仕方や学習習慣)	
11月	第2回小・中連携研究協議会 ・授業提示(小学校) ・教科等別研究協議会  小学校での外国語活動の授業 ※事前にALTと中学校の英語科教員が小学校を訪問し、指導案検討や模擬授業を行った。	・前学期に意見交換した小・中それぞれの教科の研究計画や授業研究会のポイント(低・中・高学年段階ごとの指導の重点や実際など)に基づいて授業提示をして、そのことにかかわる協議を通して研究の進展状況等を確認する。 国語・社会・算数・理科・図工・道徳・外国語 ※外国語は、ALTと中学校英語科教員による合同授業 ・「確かな学力の基盤となるスキル・資質」にかかわる資料をもとに、小中9年間の見通しの中で、発達の段階ごとの指導の重点や小中の学習内容のつながりについて協議するとともに、各学年のキャリア発達段階に合わせた授業改善について検討する。

(3) 中学校への体験入学でのガイダンスと異年齢交流

教職員の情報交換や研修だけでなく、児童生徒が互いに交流を深めるとともに、小学生の中学校生活への不安を取り除き、中学生は1・2年生を中心に、上級生としての自覚をもって中学校生活をより主体的に過ごすようになることをねらいとして、毎年体験入学を実施している。

<中学校体験入学のねらい>

- ・体験入学を通して、入学予定児童が中学校生活への期待感と心構えをもつことができるようにする。
- ・中学1, 2年生が、上級生としての自覚をもてるようにする。

<中学校体験入学の日程と内容>

時刻	主 な 内 容									
13:20	○ ガイダンス～体育館(進行：2年生) 1 歓迎の言葉 2 中学校の校歌(1・2年生) 3 中学校生活について(生徒会) ①行事 ②部活動 4 応援歌とエール(応援団) 5 小学校の校歌(各小学校) 6 感想発表(小学生代表)							応援団によるエール		
14:10	○ 体験授業～中学校1年生と合同の体験授業 (中学生が小学生とペアになって、授業に参加する)									
	教科	教室	授 業 の 内 容	C小	D小	B中	合計			
	国語	1-1	古典を読もう	3	10	13	26			
	社会	1-2	歴史博士を目指そう!	4	10	14	28			
	数学	1-3	数学で遊ぼう	4	10	14	28			
	理科	理科室	科学の世界を広げよう	4	10	14	28			
	音楽	音楽室	リコーダーによる合奏	3	10	13	26			
	美術	美術室	じっくり描こう	3	10	13	26			
	保体	体育館	バドミントン	7	18	27	52			
	技術	PC室	プレゼンテーションソフトを体験しよう	3	10	13	26			
	家庭	被服室	ランチオンマットをつくろう	3	10	13	26			
	英語	1-4	Let's enjoy English together!	3	10	13	26			
15:05	○ 部活動見学・体験～体育館・グラウンド・テニスコート									
15:30	○ 終わりの会～小学校ごとの控室 ・部活動アンケート用紙記入 ・終わりの言葉～中学生による小学生へのメッセージ									

(4)成果

- 体験入学を通して、小学校6年生において中学校生活への期待が膨らむと同時に、中学校1年生においても次の学年に進むという意識が芽生えた。
- 授業参観や協議会を通して、学習指導に関する共通理解が図られた。特に、家庭学習の習慣化に関して、小学校低学年から中学校3年まで学年ごとに「家庭学習の手引」を作成し、共通の方法で家庭学習の習慣化を図ることができた。
- 学級づくりで、小学校から中学校にかけての配慮すべき点について確認することができた。(友人関係・生活習慣など)
- 授業中における学習規律の定着化のため、小学校から「あいさつ」「授業の準備」「話すこと・聞くこと」「話し方」など小学校で培ったものを生かしながら、中学生を育てることで共通理解がなされた。
- 確かな学力を身に付けるため、キャリア教育の視点から各段階での学力の基盤となるスキル・資質・能力をまとめ、それに基づいて指導を進めることができた。

例：社会科(小学校1・2年生は生活科)

学 年	確かな学力の基盤となるスキル・資質・能力（キャリア教育の視点から）
小学校1年	<ul style="list-style-type: none"> ・健康や安全に気を付けて、遊びや規則正しい生活をする。 ・身近な人々と適切に接する。
小学校2年	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に必要な物を買ったり、大切に使う。 ・みんなで使う物や場所、施設を正しく利用することができる。 ・様々な手段を適切に使って情報を交わしながら相互に交流する。 ・自分の成長を喜び、支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつ。 ・日常生活に必要な習慣や技能を身に付ける。
小学校3年	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科的事象を実際に観察したり、聞き取り調査を行ったりする。
小学校4年	<ul style="list-style-type: none"> ・地図や地図帳、収集した各種の資料などを活用して調べたり、調べたことを工夫して表現したりする。 ・身近な地域の様子を絵地図に表したり、地図記号を活用したりする。
小学校5年	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の産業や国土等について、具体的に調査する。 ・地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用して調べたり、調べたことを目的に応じた方法で表現したりする。
小学校6年	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の歴史と政治及び国際理解に関する社会的事象を調査する。 ・地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用して調べたり、調べたことを目的に応じた方法で表現したりする。
中学校1年	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な規模の地域的特色をとらえる調べ方や学び方の視点や方法を身に付ける。 ・世界的視野から我が国の特色を多面的・多角的にとらえる方法を身に付ける。 ・我が国の歴史の大きな流れを理解する。
中学校2年	<ul style="list-style-type: none"> ・各時代の特色を世界の歴史を背景にとらえる。 ・歴史上の人物や文化遺産を尊重する態度を身に付ける。 ・個人の尊厳や人権尊重の意義を正しく理解する。
中学校3年	<ul style="list-style-type: none"> ・民主政治の意義、国民生活の向上と経済活動のかかわりを理解し、社会の諸問題について考えようとする態度を育てる。 ・世界平和の実現や人類における福祉の増大のためには、各国の協調が必要であることを認識する。

＜事例3＞ 地域とともにすすめるキャリア教育の取組 — E中学校の場合 —

地域と学校が互いに連携を図りながらキャリア教育に取り組み、地域ぐるみで子どもたちの社会的・職業的自立に必要な能力等の育成を図る

【学校の状況】

- 生徒数270名(9学級)
- 水田と豊かな自然に囲まれたのどかな環境にある。学校の教育活動に対する保護者・地域の期待は非常に高く、協力的である。生徒は概して素直・素朴で礼儀正しく、日常の活動にも意欲的に取り組む。幼いころから地域の方々やPTAの協力が盛んな環境で生活しているため、大人に対する信頼感も強い。
- 学校教育全体を通じたキャリア教育を推進するに当たって、地域や保護者との連携を図り、地域ぐるみで子どもたちを育てる取組を進めた。

【キャリア教育のねらい】

- 地域の方々の協力のもとに様々な体験をし、ものを作り上げる喜びや共同作業の重要性を意識させ、勤労観や職業観等の価値観を育成する。
- 地域の方々から教えていただいたり、仲間と協力し合ったりして、人間関係を築き、コミュニケーション能力を育成する。
- 地域の方々との交流や共同作業を通して、互いの良さや自分の良さを認め合う態度を育成する。



地域と学校が連携してキャリア教育に取り組み、共に子どもたちを育てる

(1) E中学校のキャリア教育の特色

E中学校では、「職場体験」はもちろん「1年間を通じた米作りの体験」「地域のかかしまつりへの参加」「学校農園での畑作体験」「PTAとの資源回収」「近隣の高校と連携した公民館学習会」「地域の方による文化体験学習会」など、学校とPTAや地域が連携した特色ある取組を実践している。E中学校のあるF市にはすべての学校区に「地域サポート委員会」という地域の方々による組織があり、学校での教育活動を様々な面から支援している。生徒たちは、地域の方々との交流や共同作業を通して人間関係を築き、社会的・職業的自立のために必要な様々な能力や態度を身に付けている。



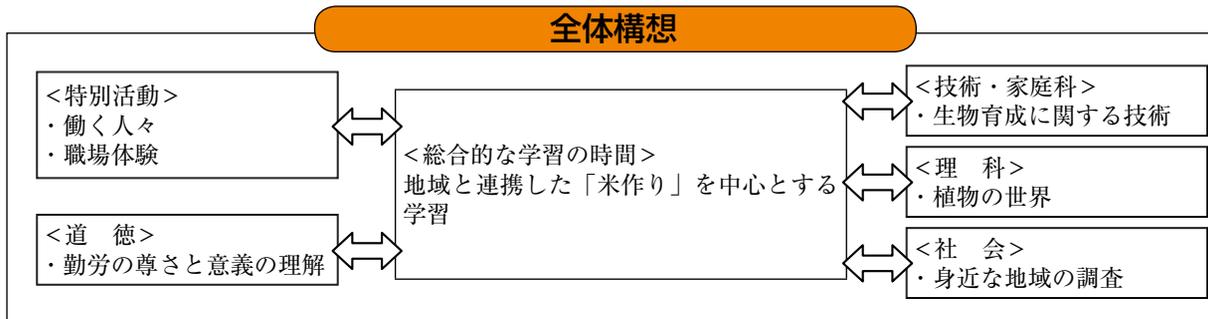
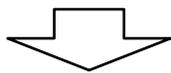
かかしまつりの屋台で焼きそばをつくる生徒たち



PTAと資源回収で働く生徒たち

(2) E中学校における「米作り」(第1学年総合的な学習の時間)の具体的実践

- ねらい**
- 私たちの主食である米がどのようにしてできるのかを体験的に学び、作る人への感謝の気持ちや働くことへの関心・意欲を育てる。
 - 地域の方々との交流や共同作業を通して、多様な集団の中で、コミュニケーション能力や豊かな人間関係を築く能力を育成する。



時期	内 容
4月	種まき(地域の農家の庭まで行き、説明を受けて種まきを行う)
5月	田植(サポート委員の方々と保護者の協力のもとに学校前の水田に稲の苗を植える)
6月	稲の観察(稲の成長の様子と水田の管理の状態を観察する)
7月	かかしまつり実行委員会(サポート委員会、公民館、農協、近隣の幼稚園、小学校、中学校、高校の代表)
7月 8月	かかしの制作(各学級で工夫を凝らしたもの一体ずつ) 水田の管理
9月	かかしまつりへの参加(実行委員会とともに中学生は模擬店の準備・販売・片付けを協力して行う)
10月	稲刈り(サポートの方々と保護者の協力のもとに稲刈りを行う)
11月	収穫祭(サポートの方々と保護者の協力のもとに飯ごう炊さんを行い、全員で頂く)
12月	学習発表会(学習の成果をまとめて地域の方の前で発表し合う)



みんなで田植に挑戦



稲刈りをしながら話を聞く

(3)成果

- 3年間を見通した系統的なキャリア教育を、学校教育全体を通してすすめるに当たって、地域と学校が互いに連携を図ることで、取組がより豊かで深みのあるものになった。
- 地域の方々との交流や共同作業を通して、豊かな人間関係を築く能力を育成できた。

中学校での特別支援教育におけるキャリア教育

特別支援教育の特質は、「障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う」ことにある(文部科学省初等中等教育局長通知「特別支援教育の推進について」(平成19年4月1日・19文科初第125号))。ここで言われる「自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点」は、社会的・職業的自立を目指してキャリア発達を支援するキャリア教育とも通じるものであり、特別支援教育におけるキャリア教育の重要性を示している。全ての教育活動を通じたキャリア教育の充実を図ることや、中学校卒業後就職を希望する生徒に対して労働関係機関等との連携を密にした就労支援を進めることは、障害の有無にかかわらず必要なことであるが、ここでは特に、障害のある生徒に焦点を絞って、指導のポイントを整理しよう。

中学校学習指導要領第1章総則は、各中学校に対して、「障害のある生徒などについては、特別支援学校等の助言又は援助を活用しつつ、例えば指導についての計画又は家庭や医療、福祉等の業務を行う関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成することなどにより、個々の生徒の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。特に、特別支援学級又は通級による指導については、教師間の連携に努め、効果的な指導を行うこと」を求めている(第4(8))。障害のある生徒の指導にあたっては、教員間の連携を大前提としつつ、特別支援学校からの助言や援助を活用し、家庭や各種の専門機関とも協力しながら、生徒一人一人の教育支援計画を作成して、長期的な視点に立って適切な指導と必要な支援を行うことが重要である。その際、個々の生徒の将来的な自立や社会参加を重視すべきことは言うまでもない。

また、上掲の通達(19文科初第125号)が、特別支援教育を行うため、各学校において次のような体制づくりや取組が必要であるとしていることに留意する必要がある。

- (1)特別支援教育に関する校内委員会の設置、(2)特別な支援が必要となる生徒の実態把握、(3)特別支援教育コーディネーターの指名、(4)関係機関との連携を図った「個別の教育支援計画」の策定と活用、(5)「個別の指導計画」の作成、(6)教員の専門性の向上

特に、「特別支援教育に関する校内委員会」は学校内外の連携・協力の中核となるものであり、その構成員としては、校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、教務主任、進路指導主事、生徒指導主事、通級指導教室担当教員、特別支援学級教員、養護教諭、対象の幼児児童生徒の学級担任、学年主任などが想定される。この他、スクールカウンセラーや心の相談員など生徒の実態や学校の実情に応じた構成とする工夫が求められる。

中学校において特別支援教育の対象となる生徒は、特別支援学級に在籍する生徒と、通常の学級に在籍しつつ通級による指導を受けている生徒に大別され、両者とも、特別の教育課程による指導を受けることができる(学校教育法施行規則第138条、同第140条)。その中核となる「自立活動」はとりわけ重要な役割を担っていると言えるだろう。「自立活動」は、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うために行われるものであるが、生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること、また、社会、経済、文化の分野の活動に参加することができるような力を育てていくことが求められている。自立活動の指導にあたっては、教職員の共通理解を基盤としながら、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動と密接な関連を保ち、個々の生徒の障害の状態や発達の段階等に即して、適切な指導計画の下に行うよう配慮しなければならない。

特別支援教育でのキャリア教育の指導計画を構想する際には、国立特別支援教育総合研究所が作成した「知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス(試案)』」を、一つの参考とすることも考えられる。同研究所のウェブサイト(ホームページ)で公開されている当該試案を参照していただきたい。

http://www.nise.go.jp/blog/2009/05/post_224.html